



農都共生研究会  
Agricultural laboratory

地域の資本を活かして、日本をもっと元気に、北海道をもっと明るくすることを目的としています。全国各地の地域づくりの成功例を調査し、農村と都市の共に繁栄するあり方を研究しています。さらに農村と都市の共生と交流の促進を提言し、各地の地域振興の具体的な組織と連携し、各種事業を実践します。

■活動内容

研究会は次の活動を行う。

- ① 多様な活動主体の取組活発化に向けた活動
- ② 地域住民への普及・啓発に向けた活動
- ③ 農村と都市の共生と交流推進方策の検討
- ④ 農都共生に関わるビジネスプランの検討
- ⑤ その他研究会の目的を達成するために必要な活動

2018年度 活動報告 (抜粋)

■4月14日  
「農村で楽しもう」出版記念トークショー

■6月1日  
富良野でアスパラ収穫体験

富良野在住の半農半画家イマイカツミさんの農園で、アスパラガスの収穫体験をさせて貰いました。

以前、植栽の手伝いに訪れたこともある有機栽培のグリーンアスパラガス畑。地面からすっと伸びた25センチ以上のアスパラをカマで刈り取り、かごに入れていきます。朝、短かったアスパラが、夕方には3、4センチ伸びることもあると聞いて、びっくり。収穫したアスパラは穂先を揃えたあと、根元をカットして、箱づめます。取りたての新鮮なアスパラは、みずみずしく甘みがあり、ゆでても炒めても、素晴らしいおいしさでした。



■10月10日  
「農都共生研究会 帯広フォーラム」

■11月11~12日  
慶應義塾大学大学院SDM研究科 アグリゼミ  
兵庫県加古川市視察

2019年

■1月18日  
第7回 農業・農村・地域活性化セミナー  
「農村の魅力を語る」

■3月 報告書発行

Pick up 農都共生研究会 帯広フォーラム

「農村で楽しもう」発刊記念

2018年度 農都共生研究会 帯広フォーラム  
「農村で楽しもう」発刊記念として、10月10日(水)、  
とかちプラザ 1Fで開催しました。

今回は初の帯広市での開催ということもあり、イベント前半は林代表による農都共生研究会の活動紹介を行なった後、新著書「農村で楽しもう」の取材や執筆の様子などスライドを使用して紹介しました。後半は新著書の中でも紹介されている株式会社満寿屋商店の杉山雅則社長に参加していただき、地産地消にこだわるパン作りのポイントや、東京に出店したお店の経緯やコンセプトなどを中心に講演していただきました。会場からの質問で「東京出店に社内でも反対の意見が出たと思うがどう対処したのか？」など地元ならではの鋭い質問も出ていました。

その後、杉山社長・林代表の対談形式で会場から様々な質問をいただきました。今回50名の定員に対して、定員を超える53名の参加をいただき、会場は大変盛況な雰囲気となりました。参加された方々からは「改めて十勝の農業や満寿屋の取り組みが知ることができよかったです」(50代男性)などの感想がありました。最後に抽選で10名に満寿屋の商品券がプレゼントされ、大変ご好評いただきました。

共催及び後援いただきました各社様そして、ご参加いただいた皆様にはこの場を借りてお礼申し上げます。



活動内容や掲載記事など、詳しくはホームページをご覧ください。 <http://www.noutokousei.jp/> 農都共生研究会 検索



System Design and Management

■お問合わせ  
慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科  
[日吉学生部SDM担当]

〒223-8526 横浜市港北区日吉4-1-1 協生館2階  
TEL 045-564-2518 FAX 045-562-3502

<http://www.sdm.keio.ac.jp> E-mail [sdm@info.keio.ac.jp](mailto:sdm@info.keio.ac.jp)

■2019年3月発行

発行/慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科  
農都共生研究会

企画・制作/株式会社プロコム北海道 [農都共生研究会事務局]  
〒060-0051 札幌市中央区南1条東1丁目2-1 太平洋興発ビル  
TEL 011-215-1317 FAX 011-215-1318  
E-mail [goto@procomh.co.jp](mailto:goto@procomh.co.jp)

# AGRI LABO REPORT



農林中央金庫寄附講座

慶應SDMの「アグリゼミ」

兵庫県

加古川市視察

AGRI Semi Report  
農都共生研究会

## 農都共生ラボ活動報告書 2018-2019



System  
Design  
And  
Management



慶應SDMには、専任教員による研究室型ラボのほか、幅広い分野で横断的に活動をする横断型ラボがあり、その一つとして、農林中央金庫寄附講座「農都共生ラボ(アグリゼミ)」は、2008年の開学と同時にスタートした。

農都共生は、「農村と都市の共生」の略語で、人材、経済、情報の循環による共生を目指している。農村と都市をトータルに考え、地域活性化を実現するための重要な概念である。「農都共生ラボ」は、農業・農村を大きなシステムとして捉え、「農都共生」による地域活性化に関する研究・普及活動に取り組んでいる。前野教授、林特任教授、都丸特任准教授などが参加している。林特任教授が札幌を拠点にキャスターとして活動しているため、月に1~2度、日吉協生館のSDM研究科でラボを開講している。ラボの参加者は、多様な学部出身の新卒大学院生、社会人院生をはじめ、SDM研究所研究員や学外のゲスト講師も多く、活発な議論・研究がおこなわれている。

学内におけるゼミ開催の他、農業・農村視察などのフィールド研究に力を入れており、今年度は、以下のとおりである。

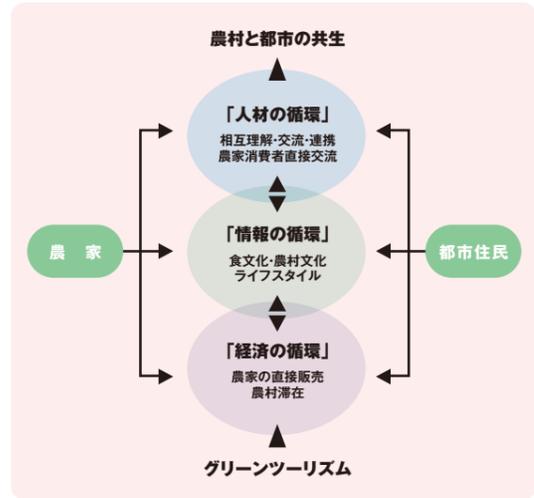
- 修了生の本山憲誠さんが埼玉県飯能市で手がけている農業や、飯能「あけぼの子ども森公園」で運営するカフェの視察
- 修了生の寄玉昌宏さんが活動に参加している兵庫県加古川市の綿栽培の視察(詳しくは4~5ページ)
- 神奈川県小田原市レモンプロジェクトへの参加(詳しくは7ページのコラム)などを実施した。



また、農都共生ラボなどの主催により、一般市民を対象にした「第7回農業・農村・地域活性化セミナー」を日吉で開催した。(詳しくは6ページ)

ラボに参加している学生の問題意識から、研究テーマは、「CSA(Community Supported Agriculture・地域が支える農業)」「農業ビジネス」「食育」など多岐にわたっている。

また、今年度は、過去2年連続、視察でお世話になった北海道沼田町の雪中米の魅力アップを考える「沼田お米プロジェクト」を立ち上げ、沼田町観光協会に提案した。(詳しくは3ページ)



農都共生ラボ担当教員



前野 隆司  
Takashi MAENO

慶應義塾大学大学院SDM研究科  
委員長・教授

キヤノン(株)、カリフォルニア大学バークレー校 Visiting Industrial Fellow、ハーバード大学客員教授、慶應義塾大学理工学部教授を経て、2008年よりSDM研究科教授。2011年4月よりSDM研究科委員長。

- 研究テーマ / システムデザイン理論・方法論、人間社会システムデザイン、技術システムデザイン など
- 著書 / 「思考脳力のつくり方」「錯覚する脳」「幸せのメカニズム」「システム×デザイン思考で世界を変える - 慶應SDM「イノベーションのつくり方」」ほか



林 美香子  
Mikako HAYASHI

慶應義塾大学大学院SDM研究科  
特任教授 / 農都共生研究会会長

北海道大学農学部卒業後、札幌テレビ放送アナウンサーを経て、キャスターとして独立。北海道大学大学院にて博士(工学)を取得。慶應義塾大学SDM研究科特任教授。北海道大学大学院農学研究院客員教授。地域活性化学会評議員。北洋銀行社外取締役。札幌在住。

- 研究テーマ / 持続可能な農業、農村と都市の共生による地域再生、食と農による地域づくり など
- 著書 / 「農都共生のヒント」「農村へ出かけよう」「農業・農村で幸せになろうよ」「農村で楽しもう」ほか



都丸 孝之  
Takayuki TOMARU

慶應義塾大学大学院SDM研究科  
特任准教授

富士ゼロックス(株)を経て現職。米スタンフォード大学の放石井浩介教授のもとで顧客価値分析を活用した事業創出および製品企画プログラムに参画し、その後国内の複数の企業に導入。現在は、慶應義塾大学大学院経営管理研究科および企業で顧客価値分析を用いた事業創出プログラムを展開。慶應義塾大学SDM研究科後期博士課程修了。博士(システムエンジニアリング学)。専門分野は、新規事業の創出、低コスト部品を調達するためのサプライヤーの開拓・評価など。

北海道沼田町雪中米の  
ファン作りを考える

# お米プロジェクト



ふるさと納税返礼品の雪中米に同封されるお米カードブック

慶應SDMアグリゼミでは、2016年から2年間、北海道沼田町で農業視察をおこない、雪冷房を利用した雪中米の貯蔵施設の視察、農業体験、聞き取り調査などを実施。「雪中米のブランド化」などをテーマに、住民の方とのワークショップもおこなった。沼田町商工会からの依頼もあり、2018年春、雪中米のファン作りのため「沼田お米プロジェクト」を開始。ファンを増やすには、子ども達に雪中米の楽しい思い出を作ってもらう必要があり、そのために一緒に食べるおいしさを実感して欲しいと考えたのが「雪中米の手まりずし」。「雪中米…みんなの会話が生まれるお米」をコンセプトに、くじ遊びの要素も加えた楽しい手まりずしのアイデアを沼田町に提案。ふるさと納税の返礼品として雪中米を選んだ方に同封されるカードとして採用されることになった。



## SDM研究科修了生の村瀬博昭さんら、地域活性学会10周年記念学会賞を受賞

地域活性学会の10周年を記念して創設された論文賞で、以下の論文が学会賞を受賞しました。

- 題名 / CSA(Community Supported Agriculture)による地域活性化に関する研究 (地域活性研究 第1巻掲載論文 2010)
- 著者 / 村瀬博昭、前野隆司、林美香子
- 選考理由 / 日本におけるCSAの概念の定着とその地域活性化に及ぼす影響を先駆的に分析した。また、続報が掲載されるなど、後の継続的な研究に繋がっている。

過去9年間に学会誌に掲載された全56の査読論文を対象として選考がおこなわれ、2論文が選ばれましたが、定性分析による研究の部門で受賞しました。尚、村瀬さんは、2011年に博士号を取得し、現在、奈良県立大学地域創造学部准教授です。



地域活性学会の表彰式

# 兵庫県加古川市視察

11月11日～12日「1泊2日」

かこっとな(加古川産コットン)の6次産業化事業と地域活性化を視察した。



兵庫県加古川市

人口約27万人、兵庫県の播磨地方の東側に位置し、東播磨の中核都市。姫路市までは電車で約10分、神戸市までは電車で約30分。鉄鋼業や毛布やウール製品などの繊維産業が発展しており、靴下の生産量は日本一を誇る。

11月11日(1日目)

農としての綿  
～収穫・加工体験～

農林中央金庫寄附講座「農都共生ラボ(アグリゼミ)」では、毎年、農業・農村視察をおこなっているが、今年度は、11月11日から1泊2日の日程で、院生など5名が、兵庫県加古川市で綿栽培と綿製品作りによる地域活性化を視察研修した。これまで、農業の食料生産に関する視察が続いたが、今回初めて、「衣」に関連する農業現場の視察となった。アグリゼミ修了生の寄玉昌宏さんが運営に協力している「かこっとな株式会社」が取り組む加古川産綿の6次産業化と地域活性化をテーマにした。

休耕田を利用してかこっとなを生産する畑で、綿の種類、生産方法、木綿産業の歴史などについて、レクチャーを受ける。学生たちは実際に畑に入り、収穫体

験も行った。1房ずつ手摘みしていく作業は思いのほか手間がかかり、栽培の大変さを感じた。収穫した綿には種がついており、これを分離する作業がある。今は機械化されているが、昔は手作業だった。また、分離した綿を糸に紡いだり、布に織るのもかつてはすべて手作業でおこなわれていた。これらの作業を、昔ながらの道具を使い、技術を伝承する地元の方たちから教わり、実際に体験をさせて頂いた。綿製品作りを知る貴重な機会となった。

その後、かこっとな生産に関わるメンバーと一緒に、加古川の地域活性化について意見交換をした。

11月12日(2日目)

コットン加工と地域活性化  
～ワークショップ～

2日目、紡績工場のオーミケンシ株式会

社加古川事業部の視察をおこなった。オーミケンシでは昔から多くの紡績実績があり、地元企業への応援として少量のかこっとなの紡糸も引き受けてくれている。紡績の工程などのレクチャーを受けた後、工場見学をおこなった。非常に大きな機械が並ぶ工場で作られていく工程に、学生たちは圧倒されている様子だった。

午後からは寄玉さんの事務所で2チームに分れてワークショップを実施した。テーマは寄玉さんから「かこっとな活用の持続可能な仕組み」を提示され、問題解決のアイデアを出し合った。発表は2チームそれぞれの学生が10分程度にまとめておこない、2日間の視察を終えた。

鷲尾さん、寄玉さん、かこっとなのメンバーの皆様、視察先の皆様には大変お世話になりました。誠にありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。

ワークショップ



黒崎さんチーム

私達のグループはかこっとなの新しい可能性のアイデアを見出すことを目的にワークショップをおこなった。最終的には肌に優しいというコットンの特徴を最大限に活かし、女性をターゲットにしたスキンケア商品開発に注力していくというものになった。



申さんチーム

“1500ha.の綿畑”を目標に休耕田を綿畑にするためには、まず、消費者側がその綿を理解し、買い求めるようにすることが重要ではないかという意見がでた。そして、それを広めるための方策として、綿摘み取り体験ツアーなどを複数提案した。



## かこっとな株式会社

〒675-0304 兵庫県加古川市志方町高畑741-1  
Tel 079-452-0311  
<http://www.mochihada.co.jp/kacotton/kacotton1.html>



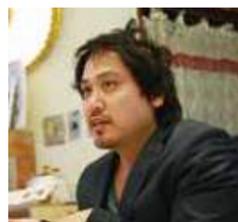
かつて日本でも有数の綿花栽培地であった加古川市。かこっとな株式会社は経産省「ふるさと名物応援事業」として認定されたかこっとな(加古川産コットン)に関する事業を展開する会社として設立。休耕田を利用して栽培する綿花は最高品質と言われる超長綿。地場産業として高い技術を持つ靴下の生産や食用油など、地域資源を活用した事業を展開、新たな産業作りを目指している。

←一面に広がる木綿畑

## 寄玉 昌宏 さん

株式会社Sydecas(シデカス)代表取締役

2016年慶應義塾大学大学院SDM研究科修了後、地元の兵庫県に戻り、介護用アパレル「uniulk(ユニユルク)」を設立。着る人も手伝う人も負担が少なく、播州織を使用したお洒落なデザインが好評。かこっとな株式会社にも参画中。



畑に入り、実際に摘み取る体験をさせていただきました



鷲尾さんより「綿」についてのレクチャー



コツをつかむと綺麗に取れます



昔ながらの道具で種を分離する体験



糸車で綿を糸に紡ぐ作業



種などを除去して糸になる直前の綿



今は機械化された綿と種を分離する作業



紡績機械について説明を受ける

木綿について語る鷲尾さん



紡績工場での聞き取り調査



慶應SDMの加古川市視察の様子が、神戸新聞(2018年11月14日付)に掲載されました。



第7回

## 農業・農村・地域活性化セミナー 「農村の魅力語る」を開催

農都共生による地域づくりの重要性を広めることを目的に、  
慶應SDM研究所農都共生ラボなどの主催で  
開催している公開セミナー

7回目の今回は「農村の魅力語る」をテーマに、2019年1月18日(金)午後7時より慶應日吉キャンパス協生館で開催した。ゲストは、慶應義塾大学大学院SDM研究科を2012年に修了し、現在、埼玉県飯能市で農業やマルシェなどの事業に取り組む本山憲誠さん。

セミナー前半は林特任教授による農都共生ラボの活動や、著書「農村で楽しもう」から日本各地の農村景観づくり、6次産業化などの好例を紹介。後半は、本山さんから「都心に通える田舎で楽しく農業しましょう!」というタイトルで、日吉キャンパス構内を利用した初めての野菜づくり、新規就農して無農薬野菜を生産・販売する苦勞など、自身の経験を交えた話をいただいた。兼業アマ農家になって農業を楽しむライフスタイルの勧めなど興味深い話に、参加者もメモを取り



ながら熱心に聞いていた。講演後は本山さんと林特任教授で対談をおこない、農業の可能性や農村の魅力について語り合った。その後、質疑応答へと移り、「若い世代に農業の素晴らしさを伝えるにはどうすれば良いのか」など、様々な質問があった。

研究者、地域づくり実践者、農業関係者など、首都圏をはじめ山梨県など遠方からも参加いただき、年齢層も高校生からシニアまで幅広く、このテーマへの関心の高さを感じた。終了後も、名刺交換や講師への質問が続き、熱気あるセミナーとなった。



**本山 憲誠さん**  
1967年、東京都出身。株式会社ひより農園代表取締役。企業経営の社会人学生として慶應義塾大学大学院SDM研究科に在籍。現在は埼玉県飯能市で営農中。トーベヤンソンあけぼの子ども森公園に「カフェ・ブイスト」、メッツアビレッジに「産直販売店ベジタワー」を展開。

### 「ギルド・デ・フロマージュ」の 日本支部「ギルド・クラブ・ジャポン」の名誉会員に

林特任教授が、チーズの普及・発展を願う世界組織「ギルド・デ・フロマージュ」の日本支部「ギルド・クラブ・ジャポン」のコンパニオン・ド・ヌール(名誉会員)となった。10月24日(水)、チーズ作りが盛んな北海道帯広市で、フランス本部のロラン・バルテミー会長が参加し、叙任式がおこなわれた。また叙任式に先立ち開催された十勝ナチュラルチーズフォーラムでは、「チーズが結ぶ農都共生」のタイトルで、チーズ生産者と消費者の連携・交流の重要性やチーズ産地のツーリズムなどを提言した。



叙任式

### 2018年度 農都共生ラボ活動成果

- 研究ノート(査読付き)**  
 ■都丸孝之、林美香子、当麻哲哉  
 「みかんの耕作放棄地を活用したみかん・レモン生産の事業性検証」  
 地域活性研究10号、2019年3月
- 林 美香子**  
**【寄稿】** 政策情報誌「毎日フォーラム」2018年5月号「農都共生」コラム  
**【メディア掲載】** 全国宅地建物取引業協会広報誌「リアルパートナー」  
 2018年11月号「6次産業化で地域の資源をビジネスに」
- 【講演会・フォーラムなど】**
- 「地産地消と地域振興セミナー」2018年6月23日 帯広市  
 「北海道米の地産地消と地域づくり」講演
  - 「NoMapsビジネスカンファレンス」2018年10月12日 札幌市  
 「空飛ぶクルマから始まる地方創生」パネラー
  - 「環境フォーラム」2018年10月28日 石狩市  
 パネルディスカッション「森と海、そして鮭」モデレーター
  - 「北海道アグリフードプロジェクト」2018年11月28日 札幌市  
 「農都共生による地域づくり」講演
  - 「北海道価値創造パートナーシップ会議」2019年1月25日 札幌市  
 トークセッション「世界の食市場の獲得に向けて」ファシリテーター

修士課程2年

江上 杏香



地域活性化という同じテーマについて研究室の垣根を超えて集まった学生が、様々な視点から議論をするというのは、非常に面白い試みだと感じました。

■修士論文研究

高校生を対象とした「システム×デザイン思考」教育が生きる力に与える影響

修士課程1年

林宣伶



沼田町の雪中米の良さを伝えるためのプロジェクトは、大変な大学院の生活のなかの癒しでもあり、食と農を通じた楽しい時間をデザインする貴重な実感になりました!

修士課程1年

佐藤 優介



秋田県出身の私は、「地方創生」や「食による地域デザイン」に興味があり参加しました。多くの学びを得て、いつか地元で貢献したいと考えております。

修士課程2年

荘寧



今年は沼田雪中米お米プロジェクトのパンフレット作成に携わることで、SDMの手法と自分の専門を活かしたとても貴重な経験がすることができた。

■修士論文研究

Impact of Photography on Visit Intention among Young Travelers -Promotion Strategy for Ecotourism of Hanno City-

修士課程1年

木下 智子



SDMでの学びを得ながら、農業の現場を食べ手が理解し連携していくこと、農と食を一体として捉えていくことの重要性に気づけるのがアグリゼミの魅力です。

修士課程1年

申起百



座学だけではなく、実際に農業に携わっている方々と話すきっかけやそれらを踏まえたワークシヨップもあり、多角的な面で農業と触れ合うことができました。

修士課程2年

本坊 健一郎



地方の価値を伝えることに興味を持ってアグリゼミに参加しました。沼田町のお米プロジェクトのような地方の価値を発信することに関われたことは貴重な経験でした。

■修士論文研究

新しい取り組みを伝えるクラウドファンディングWebページ改善ガイドラインの提案

修士課程1年

黒崎 裕有子



フィールドワーク、OBの方々との交流など、とても有意義な時間で、アグリゼミに入る前に想像していた以上の経験と新たな知見を得ることができました。

修士課程1年

須賀 健斗



私の研究テーマが「夫の積極的な家事分担を促すためのシステム構築」であり、アグリゼミが扱う「食や食卓」と近いものを感じたため、参加しました!

Column

### 神奈川県小田原市レモンプロジェクト

神奈川県西地域大学連携事業の一環として、小田原市片浦地区のみかん耕作放棄地の解消とレモン栽培に向けたプロジェクト(略称:小田原レモンプロジェクト)を実施している。SDM研究科のこれまでの研究により、みかんの耕作放棄地は、日照不足となりやすい北側斜面で発生していることが確かめられている。

レモンはみかんに比べ日照不足でも生育すること、年間の作業時間がみかんに比べ少ないこと、単位面積あたりの収穫量がみかんに比べ多いこと、また、販売単価もみかんに比べ高く、イノシシなどの鳥獣被害がみかんに比べ少ないことから、レモン栽培は農家の収益に大きく貢献することが分かっている。

小田原レモンプロジェクトは、この研究成果をもとにした実践的取組で、都丸准教授を中心に、地元農家、小田原市・神奈川県の職員、JA、アグリゼミ生、他大学の学生たちと連携し、みかん耕作放棄地の整備とレモンの植樹、小田原レモンの安心・安全のPRなど地域に密着した活動である。

